小学校

平成13年度

教育研究員研究報告書

生　　活

東京都教職員研修センター

平成１３年度

教育研究員（生活）名簿

地区名	学校名	氏名
港	飯倉小	◎山田宜裕
墨田	錦糸小	○荒堀崇子
大田	中富小	江田直子
北	第二岩淵小	新保彰子
板橋	前野小	齋藤好恵
葛飾	東綾瀬小	矢作幸嗣
武蔵野	第四小	髙村亜由美
府中	小柳小	○横溝理夫
町田	緑が丘小	村田郁子
西多摩日の出	大久野小	岩﨑典子

◎　世話人　　○副世話人

〔担当〕　東京都教職員研修センター　　指導主事　時田明子

目　　次

Ⅰ　研究主題について（主題設定の理由） ---------- 2

Ⅱ　研究の構想 ---------- 3

Ⅲ　研究の内容 ---------- 4

1　「知的な気付き」についての基本的な考え方 ---------- 4
2　知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫 ---------- 6
3　知的な気付きを見取る手立て ---------- 8
4　知的な気付きを深め広げる支援の工夫 ---------- １０

Ⅳ　実践事例 ---------- １２

1　知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫の実践事例 ---------- １２
　第１学年「いつもありがとう、おにいさんおねえさん」
2　知的な気付きを見取る手立ての実践事例 ---------- １６
　第１学年「あきとあそぼう」
3　知的な気付きを深め広げる支援の工夫の実践事例 ---------- ２０
　第２学年「あきを楽しもう」

Ⅴ　研究の成果と今後の課題 ---------- ２４

＜概　　要＞

活動や体験の中で、児童は多くの知的な気付きを生み出しているが、児童自身はその気付きを意識していないことがある。児童が自分の気付きを大切にし、生活や学習に対して一層意欲と自信をもって取り組むことができるようにするためには、知的な気付きを大切にした教師の支援が不可欠であると考えた。そこで、研究主題を「知的な気付きを深め広げる支援の工夫」とし、次のような視点から実践授業を行い検証することにした。

・知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫
・知的な気付きを見取る手立て
・知的な気付きを深め広げる支援の工夫

その結果、人や社会、自然と直接かかわる活動から知的な気付きが多く生まれることが分かった。その知的な気付きは、教師が大切に見取り効果的な支援をすることで深め広げられ、児童の新たな活動への意欲につながることが明らかになった。

Ⅰ　研究主題について

平成１３年度　生活科部会研究主題

『知的な気付きを深め広げる支援の工夫』

<主題設定の理由>

私たちは、生き生きと活動している児童の姿が生活科の授業の中でたくさん見られるように、学習活動などを工夫してきた。そして、活動に熱中し、楽しそうに進んで活動する児童の様子が見られればよい授業ができたと考えていた。しかし、一方で、この学習のねらいが達成できたかどうかについて、客観的な評価をすることが難しく、必ずしも次の指導に生かされていないという現状があった。そのことから、生活科の学習の中で児童にどのような学びがあったのかということについて、より深く考える必要があると考えた。

生活科の授業を通して、主体的に対象にかかわり、進んで活動しようという児童が増えてきている。また、その活動を通して多くのことに気付いている。しかし、その気付きが児童に定着せずに終わってしまう状況もみられる。そこで私たちは、自分の気付きを自覚し、もっとその気付きを大切にする児童を育てたいと願い、そのためには、私たちが授業の中で児童の気付きをしっかりと見取ることが大切であると考えた。

児童は、生活科の授業を楽しみにしている。「楽しかった。」「おもしろかった。」という声も活動の中でたくさん聞こえてくる。しかし、その中で児童にどんな力が付いたのかということを考えたとき、生活科の目標に立ち返って評価してみなければならない。そして、児童の学びの姿から、もう一度教師の支援のあり方について見直していく必要があると考えた。

例えば、１年生が自分たちで作ったサツマイモを掘ったときのことである。畑からあふれるほどに生い茂ったサツマイモのつるを抜いたとき、児童はそのあまりの長さに驚いた。そして、すぐにそのつるを二人でひっぱりっこしたり、体に巻き付けたり、縄跳びをしたりして遊び始めた。

この楽しそうな児童の姿をどうとらえたらよいのであろうか。ただ単に遊んでいるだけととらえることもできる。しかし、体験を通してつるの特徴に気付き、「こんな身近な物でも遊べるんだ。」「飾りも作れそうだな。」「いろいろ工夫すると楽しく遊べそうだ。」と考えていると見取ることはできないだろうか。このような気付きは、遊んでいる児童自身も自覚してはいないであろう。そこで、児童の気付きを教師が見取り、その子自身の活動を認め、周囲の児童に広めていけば、この活動自体が価値あるものとなり、その後の活動も充実したものになると考える。

自分の気付きが価値あるものだと分かることで、児童は自分自身に自信をもち、生き生きと活動するようになる。そして、その活動の中でまた新たな「知的な気付き」をしていく。このような学びを繰り返すことで、児童は自分自身への理解を深め、学習への意欲をもち、自立への基礎を身に付けていくのだと考える。

以上のことから、研究主題を『知的な気付きを深め広げる支援の工夫』と設定し、実践を通して追究することとした。

Ⅱ　研究の構想

児童の実態

・体験的な活動は意欲的に取り組む。
・身近な人や環境とかかわる体験が少ない。
・自分のよいところに気付くことができない子もいる。
・自分の気付きの価値に気付かない子もいる。

生活科の目標

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

生活科の改善の基本方針

・児童が身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を一層重視すること
・直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にする指導が行われるようにすること
・各学校において、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動や、重点的・弾力的な指導が一層活発に展開できるようにすること

教育課程の基準の改善の基本方針

・豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成
・自ら学び自ら考える力の育成
・基礎基本の定着と個性を生かす教育の充実
・特色ある教育活動の展開

目指す児童像

・自分の思いや願いをもって、主体的に活動する子
・人や社会、自然と直接かかわる活動を楽しむ子
・活動や体験の中から様々なことに気付き、それを大切にする子

研究主題

知的な気付きを深め広げる支援の工夫

研究の仮説

生活科の授業において、以下の３つの視点に留意して学習を進めれば主題にせまることができるだろう。

(1) 活動の目的を明確にし、人や社会、自然と直接かかわる活動や体験を効果的に学習に取り入れる。
（知的な気付きが生まれる）

(2) 児童一人一人の知的な気付きを見取り、認め自信をもたせる支援をする。
（知的な気付きの意味付けをする）

(3) 知的な気付きを比較や関係付け等をしながら、児童が自分なりに表現できるような支援をする。
（知的な気付きを深め広げる）

研究内容

(1) 「知的な気付き」について基本的な考え方を明確にする。
(2) 知的な気付きが生まれるような学習活動を工夫する。
(3) 知的な気付きを見取る手立てを学習活動を通して探る。
(4) 知的な気付きを深め広げる支援を工夫する。

研究方法

基礎研究

・先行研究の分析・整理
・知的な気付きの概念と考察

授業研究

次のような視点で授業実践を行う。

調査研究

・実態調査
・授業後の知的な気付きの考察

〈視点１〉知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫
　ア　一人一人が目的を明確にできる活動を設定する。
　イ　一人一人が主体的に取り組める活動を取り入れる。
　ウ　願いが強まるように、繰り返し行う活動を設定する。
　エ　人や社会、自然にかかわる喜びを味わう活動を取り入れる。
　オ　自分がしたことや考えたことを振り返る活動を設定する。

〈視点２〉知的な気付きを見取る手立て
　ア　活動前に、あらかじめ児童の主な気付きを予想しておく。
　イ　活動中の児童の様子からとらえる。
　ウ　活動後、児童が作品やカードなどに表現したものから分析する。

〈視点３〉知的な気付きを深め広げる支援の工夫
　ア　一人一人が自分の気付きを確認し、興味を深めるための支援をする。
　イ　気付いたことに対し、お互いの気付きのよさを発見するための支援をする。
　ウ　気付いたことを振り返り、さらに深く追究しようとするための支援をする。
　エ　気付いたことを他の人に教えたり伝えたりするための支援をする。
　オ　これまでの活動をもとに、新たな思いや願いをもつための支援をする。

Ⅲ　研究の内容

1　「知的な気付き」についての基本的な考え方

(1)　「知的な気付き」のとらえ方

> 児童が、思いや願いをもって取り組んだ活動を通して得られる気付きや、自分自身の振り返り、友達とのかかわり、教師などの支援等により児童に明確に認識され、実感を伴って得られるような気付きを「知的な気付き」ととらえる。

児童一人一人が「こんなことをしたい。」「○○を作りたい。」という活動への思いや願いを強くもったとき、知的な気付きが生まれやすい。思いや願いをもった活動の中では、「すごい！」「どうしてこうなったのかな。」「あ、そうか。分かった！」「なるほど。」などの実感を伴ったつぶやきが多く聞かれる。そして思わず「こっちに来て！」「見て見て！」と他の人に知らせたくなる。このような様子を示す場合は、児童が自分自身で気付きの価値を見いだしていることが多い。そして、気付いたことを表現したいという思いがふくらみ、その思いが表にでやすくなるので、気付きを見取りやすい。一方、じっと何かを見つめていたり、熱中して作業していたりして、行動には表れているのだが、言葉で表現しないために気付きが見取りにくい児童もいる。気付き方や気付きの表し方は一人一人異なり、気付きの価値に気付かない児童もいるということである。

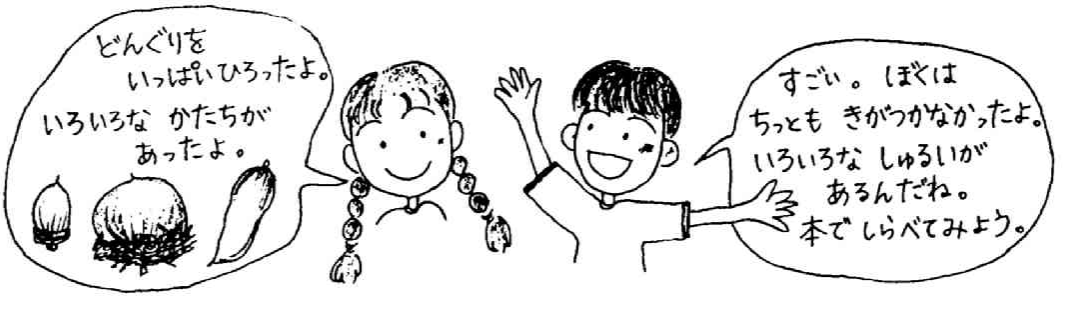
気付いたことの価値を認識するきっかけは様々である。すでに自分自身で「これはすごい発見だ。」と気付きの価値を感じ、表現する児童もいる。また、友達に認められて「そうか。」と初めてその価値に気付いたり、支援者にほめられて自分の気付いたことに自信をもったり、人とのかかわりを通して気付きを認識する児童もいる。例えば、次のような児童の姿を「知的な気付き」ととらえることができるだろうと考えた。

○自分自身の認識・・・・・・・・活動の中で、先行経験と比較したり、ひらめいたりする。

〈例〉

○友達とのかかわりによる認識・・「本当だ！大発見だね！」などと認められたり、「不思議だね。どうしてだろう。」と一緒に考えてくれたりする。

〈例〉



○教師等の支援による認識・・・・児童のつぶやきやしぐさなどから、子どものつぶやきを他の言葉で言い換えて確かめたり、共感したり、認めたりする。

〈例〉

このような姿を的確にとらえるためには、支援者は児童一人一人の反応に敏感になり、その児童の表情やしぐさなどの様子や、発せられたことを見取ることが大切である。そして見取ったことを児童に返し、気付きの価値が認識できるような適切な支援をすることが重要である。その支援により、児童の活動への思いや願いはさらにふくらみ、多くのことを学んでいくことができると考える。その結果、児童の心も育ち、自分に自信をもつことができ、生活科の目指す『自立への基礎』というねらいを達成することができると考える。

(2) 「知的な気付き」の重要性

「知的な気付き」は様々な学びを生む。

「知的な気付き」は、発見や成功体験の喜びを感じる柱となり、表現への意欲を高める。そして表現することで、自分のことを伝えたり、友達や自分自身の心身の成長にも気付いたりすることができる。また、「知的な気付き」を振り返ってとらえ直すことにより、自分に身に付いたことをその後の学習や生活にも生かすことができる。

そして、児童の「知的な気付き」をていねいに見取り、深め広げる過程において、児童のどのような力を引き出して育てるのか、児童が何を思い願っているのかが明確になる。そのような取り組みは児童だけでなく、教師にとっても新たな学びへの発展へとつながると考える。

(3) 「知的な気付き」を大切にする支援

児童の「知的な気付き」を大切にするということは、一人一人のことをよりよく理解し、発したものを受け止め、児童が感じたことに共感し、児童一人一人の思いや願いが実現できるようにすることである。

「知的な気付き」を大切にする方法はいろいろあるが、その中でも私たちは“支援”が特に大切であると考えた。そして、“支援”によって一人一人の「知的な気付き」をより多くの友達に広げ、共有することによって、学びの深まりや広がりにもつながっていくものと考えている。

そこで、次に、効果的な支援を行うために、具体的な支援の工夫を「知的な気付きが生まれる」「知的な気付きを見取る」「知的な気付きを深め広げる」という視点から考えることにした。

2　知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫

(1) 知的な気付きを示す具体的な児童の姿

生活科では、直接かかわる活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にする指導が行われることが求められる。知的な気付きは、学習活動の組み方と関係すると考える。そこで、知的な気付きはどのような場で生まれるのかということについて検討することにした。始めに、自分たちの授業実践の中から知的な気付きが生まれたと考えられる事例をもちより、分析した。以下はその分析例である。

＜事例１＞

赤ちゃん用のスプーンをつかってみたよ。赤ちゃんはグーでしかものを持てないから、こういう形をしているんだ。（普通のスプーンより曲がっている。）	→	赤ちゃん用のスプーンを握って初めてどうしてそのような形をしているのか分かった。実際に体験することによって、形だけを見ていては分からなかった原因に気付いた。

＜事例２＞

１年生にハムスターのことを教えてあげるのに、作文に書いて説明したら分かってもらえなかった。どのようにしたら１年生に分かってもらえるかな。そうだ！紙芝居を作ったら１年生には分かりやすいね。絵があると分かりやすいよね。	→	１年生にハムスターのことを教えてあげたいという明確な目的があって、その目的を達成するためにどのようにしたら１年生に分かりやすいかを考え、表現方法を自分で工夫した。

＜事例３＞

町探検で、お巡りさんが自分の名前を覚えていてくれた。うれしいな。僕も相手の名前を覚えるようにしよう。そしたら次は名前で呼べるね。	→	名前を覚えてもらった経験をもとに、互いに名前を知るともっと親しくなれることに気付き、自分も名前を覚えようとしている。双方向のかかわりの大切さや、相手とのよりよいかかわりに気付くことができた。

＜事例４＞

魚やさんにいきなり行ってお話していいのかと心配だったけど、優しく答えてくれたよ。２回行ったから放課後一人でもいけたよ。今度はおじさんの子どものころについて聞いてこようかな。	→	一度だけでなく２回３回とかかわることにより、もっと話したい、今度は秋の魚について聞いてきたいなと願いが強まり、かかわり方にも深まりが見られるようになった。

＜事例５＞

Ａちゃんが、段ボールを切りにくそうにしていたよ。私も自分のことで手一杯だったから手伝えなかった。私の仕事は家でできるからやってこよう。そうしたらＡちゃんを手伝えるね。	→	一人で切れなくて困っていた友達に気付いていた児童に、どうしたらよかったかを問いかけ行動を振り返らせたところ、自分の仕事は家でもできるので、学校ではＡさんを手伝ってあげるという判断をした。

このような分析から、次の５つの活動を単元の中に効果的に組み入れることによって、知的な気付きが生まれるのではないかと考えた。また、なぜ５つの活動が必要なのか、その必要性についても考えてみた。

(2) 知的な気付きを生み出す５つの活動

ア　一人一人が目的を明確にできる活動を設定する。　＜事例２＞
イ　一人一人が主体的に取り組める活動を取り入れる。　＜事例１・２＞
ウ　願いが強まるように繰り返し行う活動を設定する。　＜事例４＞
エ　人や自然、社会にかかわる喜びを味わう活動を取り入れる。＜事例３＞
オ　自分がしたことや考えたことを振り返る活動を設定する。　＜事例２・５＞

ア　一人一人が目的を明確にできる活動を設定する。

活動するに当たっては児童一人一人が、常に活動の目的を明確にもっていることが大切である。目的なしに活動すれば、学習が活動だけにとどまり、何が身に付いたのかあいまいなままで終わってしまう。これから何をするのか児童が活動の目的をはっきりととらえることができるような場を設定することが大切になってくる。

イ　一人一人が主体的に取り組める活動を取り入れる。

受動的な活動をしたのでは、思いや願いをもちづらい。また、気付きも生まれにくい。自分から対象物に主体的にかかわってこそ自分の思いや願いももちやすい。また、自分の思いや願いをもてば、自分なりの気付きも多く生まれると考える。そういう意味でも主体的に取り組める活動が必要であると考える。

ウ　願いが強まるように繰り返し行う活動を設定する。

例えば公園に行ったとき、初めは物珍しくて遊具で遊んでいるだけかもしれない。しかし、友達が持っていた落ち葉に気付き、次は自分も落ち葉拾いをしたいという願いをもつようになる。一度きりの活動では体験できることには限りがある。しかし、繰り返し活動することで児童の思いや願いのもとに活動する機会が増え、そこに新たに知的な気付きが生まれる可能性もある。

エ　人や自然、社会にかかわる喜びを味わう活動を取り入れる。

児童と人や自然、社会との主体的なかかわりがあれば、喜びや成就感を得られることが多い。かかわる対象は、毎日水をあげている朝顔であったり、近所のおじさんであったり様々である。大事に大事に育てた朝顔が咲いたときは喜びもひとしおであるだろう。近所のおじさんに挨拶をしたら、おじさんも自分と同じ小学校出身だったことが分かってびっくりしたり、うれしかったりする。このような躍動する心の動きの中から、知的な気付きは生まれてくると考える。

オ　自分がしたことや考えたことを振り返る活動を設定する。

活動しただけでは児童の気付きを十分に生かすことができない。活動を振り返る場をもつことにより、児童は自分の気付きを確認し、活動の見通しをもつことができると考える。自分がしたこと、考えたことを振り返ったり友達に広めたりする場は、気付きをさらに深めたり広めたりする場でもあると考える。

3　知的な気付きを見取る手立て

児童が自らの思いや願いをもって学習活動を進めていくとき、知的な気付きが児童の中に生まれてくる。教師はそれらの知的な気付きを肯定的に見取り、それを深めたり広げたりできるような効果的な支援をしていく必要がある。

そこで、知的な気付きを見取るために、次のような手立てを考えた。

ア　活動前に、あらかじめ児童の主な気付きを予想しておく。

これまでの活動の様子を記録した見取り表などをもとに、児童一人一人について気付きの傾向などを分析する。そして、児童の気付きをあらかじめ予想しておくことによって、気付きを見逃さないようにすることが大切であると考える。

例えば、２年生のＢ児は、自然に対する興味関心は強いが、社会的なものに対する関心が弱い傾向にあった。そこで、教師はＢ児が身近な人に働きかけるような場面を設定し、人とかかわる体験をさせたいと考えた。単元「あきを楽しもう」で、代々木公園に１年生と一緒に地下鉄に乗ってどんぐりを拾いにいくので、事前に地下鉄に乗る活動を組んだ。その活動の中で、Ｂ児には、１年生にとって危険なこと、気を付けたいことなどの気付きが多く生まれ、１年生のことを気遣いながら、かかわる姿が見られるようになった。

イ　活動中の児童の様子からとらえる。

児童の動作、発言、つぶやき、表情などから知的な気付きをとらえる。特に次のような様子に着目すると、知的な気付きを見取りやすいことが実践の中から明らかになった。

①　一人でじっと考えたり一つのことに熱中したりしている様子

〈じっと見つめる目〉

一生懸命に考えていたり、他のことに目も向けずに対象物とかかわったりしているときは、児童の中に対象に対するこだわりがあり、知的な気付きの生まれることが多いときである。

②　とまどっている様子

とまどっているということは、自分の考えと異なっていることと出会ったということである。新たな発見や気付きの生まれるきっかけになることがあるので、児童のとまどいの表情などを見落とさないことが大切である。児童の様子の中でも、特に配慮をして見取りたい。

③　強い驚き、疑問、喜びの表情が現れている様子

④　他の人（友達、先生など）に繰り返し声をかけている様子

③も④も、児童が自ら思いを表出しているので、気付きの内容などを引き出すような言葉かけをすることが大切である。また、児童自身が気付いたことを認めてもらいたがっているので、それに共感したり賞賛したりするような支援が必要である。

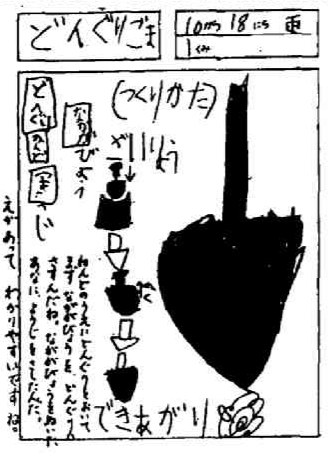
⑤　行動に変化が生じている様子

例えば、虫好きな児童がバッタをつかまえれば、その場の興味で「飼いたい」と言うことが多い。しかし、「飼いたい」と言っていたのに「逃がした」という場合がある。行動や気持ちの変化のきっかけになったことを適切にとらえることが必要である。児童の中に「自然や生命を大切にしなくてはいけない」などの知的な気付きを見取れることがある。

ウ　活動後、児童が作品やカードなどに表現したものから分析する。

以下のものを活用することによって、気付きの変化や傾向をとらえることができる。

学習カードやメモ	作　品	相互評価の付箋
時間ごとの活動の様子、児童の思いや願い、知的な気付きなどを見取る。	製作過程も考慮しながら、思いや願いとともに、気付きや工夫などを見取る。	他の児童の活動に対して評価をする児童の考えなどを見取る。



<学習カードの例>

また、活動中に見取れなかった気付きを次のような方法で拾い上げることも大切である。

・ビデオやカメラなどの視聴覚機器の活用

・T・T、ゲストティーチャー、保護者などの授業協力者からの情報提供

・児童からの聞き取りや日記、日常観察など

児童のカードや作品などをためてポートフォリオのような形で残しておき、児童自身が活動を振り返ったときに、自分の気付きや自分自身のよさを確認できるようにしておくことも大切である。

また、活動中の児童の様子を、見取り表に継続的に記録し、次回の活動や気付きがより深まるように支援をする手立てとする。

授業中に記録をする時間がない場合は、授業後の早いうちに記録をするとよい。

この表を単元の最初から最後まで通して見ると、児童の変容が明らかになったり、今後の学習活動の計画を立てるのに役立てたりできると考える。

氏　名	木のはや木のみ、たねであそぼう	
	◆身の回りの仕組や自然に関心をもって観察・活動している様子	◆どんぐり拾いや、どんぐりで遊んだり作ったりしている様子
		こま
	図鑑をもってくる、どんぐり拾い	こま、トトロ
	どんぐりあつめ 熱心	こま、トトロ、人形
	図鑑をもってくる 木の話	トトロ、こま
	ビデオの実を観察する。	こま、とても 上手
	身だしカードをもってくる	穴があいられず、○○くんに教えてもらう
	図鑑をもってくる 木の話	トトロ
		やじろべえに挑戦

<見取り表の例>

児童一人一人の知的な気付きを深め広げるためには、上記の見取りや次ページに述べる支援が行われる。その際に、児童の様子から見取ったことをもとに次のように評価していくことが大切であると考える。

①その場その場の児童の様子を見取り、それを生かしていくための評価	②見取り表をもとに、次の活動における児童の様子を予想するための評価	③単元全体を通して見取った興味関心・活動状況・気付きについての評価

①の評価は、児童一人一人に対する日頃の観察や対応などとも密接につながっており、的確な状況判断による適切な言葉かけが必要である。②や③の評価は、収集したデータをもとに児童の活動の様子や気付きの傾向を分析して、児童一人一人に対して適切な支援を行うために大切なものである。また、教師の授業の組み立てや学習活動の設定などを反省し、改善していく上でも有効であると考える。

４　知的な気付きを深め広げる支援の工夫

低学年の児童は、様々なことに気付き、発見し、その喜びや驚きを表情に表したり誰かに伝えようとしたりする。教師は、日々の学校生活を通してその児童がどういうときにどのような行動をとるのかなどの児童理解に努め、一人一人の気付きの傾向をあらかじめ把握しておく必要がある。小さな表情の変化やつぶやきを敏感にとらえ、支援につなげていくことが大切である。

また、教師は各活動の単元目標を十分に理解し、多様な学習活動を展開していかなくてはならない。児童にどんな力をつけたいのかということを明確にすることで、支援の方向が決まってくる。さらに、活動内容に関する確かな教材観をもつことにより一層その場に応じた適切な支援ができる。

このような教師の姿勢によって、その気付きをさらに深めたり広げたりすることができると考える。これらの考えをもとに、私たちは授業実践を通して次の５つの支援が有効だと考えた。

ア　一人一人が自分の気付きを確認し、興味を深めるための支援をする。

Ｐ８で述べたように、活動中の児童の様子から多くの気付きをとらえることができる。

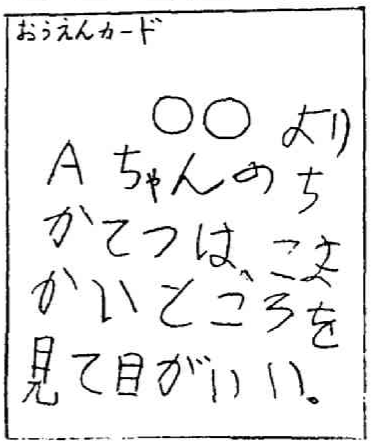
「あきとあそぼう」の活動中、Ｃ児が桜の葉と他の木の葉を比べて、蜜腺が膨らんでいるのを発見した。担任が「すごいよ。先生も知らなかったことをＣさんが発見しました。」と気付いたことを全員に紹介すると、Ｃ児はとてもうれしそうな表情になり、次の時間も積極的に活動した。

児童は活動する中で無意識のうちに何かを発見していることがある。教師が児童の活動を敏感に見取り、共感的な言葉をかけることで発見したことが児童に意識化されてくる。それをもとに話を聞き、方向性をもって助言するなどの支援をすれば、児童は自信をもち、自分の活動を振り返って、さらに詳しく調べてみよう、もっと見つけてみようと意欲が喚起され、活動が発展していくと考える。

イ　気付いたことに対し、お互いの気付きのよさを発見するための支援をする。

教師と児童、児童と児童が認め合うことで、さらに気付きが価値あるものへ変容していくと考える。

活動の中で書いたカードや作品を掲示し、友達同士で作品を見合う時間を設定する。それぞれが気付いたことや考えたことを知り、「Ｄさんはこんなことも気付いてすばらしい。」「Ｅさんはもっとこうするといいよ。」など、子どもなりの評価を応援カード（付箋）などに書き、作品に添付する。友達に認められることでお互いに活動の質を高めていくことができると考える。



<応援カードの例>

ウ　気付いたことを振り返り、さらに深く追究しようとするための支援をする。

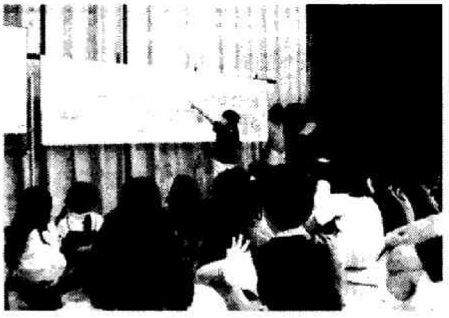
生活科ではしばしば同じ活動を繰り返すことがある。その中で、児童は様々な気付きを積み重ねていきながら、活動を発展させていく。例えば２年生の「まちたんけん」の活動で、ある店に行って話を聞いた。１回目は緊張感もあり、メモしていったことだけを質問するのがやっとだったが、学校にもどりその内容を振り返ることで、次はこういうことを聞きたい、こんなことをやってみたいという思いや願いが生まれた。２回目以降は、徐々に店の人との人間関係が深まり、質問から会話へと進んだ。お店の人からいろいろな話をしてもらうことで、新たな発見をすることができた。

このような活動をするために、まず教師がゆとりのある活動計画を立てることが大切である。それによって、児童の思いや願いの深まりに対応した活動を行うことができる。その際、児童とのパイプ役となり、かかわる人との打ち合わせを綿密にしておく必要がある。

また、活動したことをカードにかいたり写真に撮ったりして、記録として常に振り返る材料となるよう掲示しておく。「この前は○○だったけど今日はどうだった？」等の児童に意識をもたせるような教師の言葉も有効である。

エ　気付いたことを他の人に教えたり伝えたりするための支援をする。

気付いたことを自分だけのものにしておくのではなく、皆に伝え認められることによって、児童は自信をもち、その後の活動に一層意欲的に取り組むことができるようになると考える。そのために、教師は、活動計画の中に気付いたことを伝える場や時間を意図的に設定する。伝える対象はクラスの友達、他学年の児童、保護者、ゲストティーチャー、地域の人々などが考えられる。活動内容に応じて、新聞、劇、紙芝居、すごろく、手紙など児童が自由に発想し、表現できるよう支援していく。そして、それらの活動の中で一人一人が自分なりの考えをもち、意欲的に取り組んだり、良い発想が生まれたりしたときはそのよさを認め、他の児童に伝えていくことも大きな支援の一つとなる。



〈全校集会で発表する子どもたち〉

オ　これまでの活動をもとに、新たな思いや願いをもつための支援をする。

児童に新たな思いや願いをもたせるためには、まず児童が成就感を得られるようにすることが大切である。例えば、朝顔に毎日水やりをし大切に育てていった結果、花が咲き実がなったときに、「また朝顔を育てたいな。」「今度は他の花を育てたいな。」などの次の思いや願いが生まれやすい。

また、学習環境を整えることも大切である。例えば、児童がどんぐりを拾ってきたときに、どんぐりの本を開いて置いたり、やじろべえやこまを作りさりげなく置いたりすると、児童は「こんなのもどんぐりで作れるんだ。」「ぼくも作ってみたいな。」と思いを膨らませていくのである。

Ⅳ　実践事例

1　「知的な気付きが生まれるような学習活動の工夫」の実践事例

第１学年　「いつもありがとう、おにいさんおねえさん」

(1) 本単元における学習活動の工夫

次の５つの視点で活動を精選し、活動計画に取り入れることで、児童が活動を展開する際、気付きが多く生まれるように考えた。

記号	活動の視点	活動の内容
ア	一人一人が目的を明確にできる活動を設定する。	・６年生の仕事を疑似体験した感想をもとに計画を立てる。 ・在校生に聞き取り調査を行ったことをもとに計画を立てる。
イ	一人一人が主体的に取り組める活動を取り入れる。	・日常的に６年生を中心とした人たちに対する「ありがとうカード」を作り掲示する。 ・早い段階で６年生の仕事を疑似体験する。 ・６年生に仕事をさせてもらったり教えてもらったりする。
ウ	願いが強まるように繰り返し行う活動を設定する。	・授業時や休み時間などを使い、何度も聞き取り調査をする。 ・６年生に仕事を手伝わせてもらうなどの活動を、授業中や休み時間、朝の時間などに何度も行う。
エ	人や社会、自然にかかわる喜びを味わう活動を取り入れる。	・６年生に教えてもらったり一緒に活動したり、また学校の人々に聞き取り調査を行ったりする。 ・自分たちができることを考え実行する。
オ	自分がしたことや考えたことを振り返る活動を設定する。	・各活動の後や途中に情報交換や話し合いを行う。 ・６年生の仕事マップを作る。 ・６年生一人一人にクラスで考えたお礼の手紙を書く。

また、「人や社会、自然にかかわる体験を効果的に取り入れる」ために、本単元では次のようなことを重視して活動を取り入れた。

・学校について調べる活動を９月に設定する。

学校探検の流れの中で、学校に慣れ経験を積んできた２学期に本単元を組み入れ、自分たちの生活との関連を図り、自分とのかかわりを感じ考えながら進められるようにした。

・６年生とのかかわりを重視する。

６年生とのかかわりを中心に考え、６年生への愛情や親しみを大切にしながら、児童の意欲を高め課題意識をもたせた。

(2) 活動計画　（全１５時間）　　【　】は活動の視点

単元のねらい　・６年生の仕事を調べ体験することによって、６年生への愛情を深めるとともに、学校のことをもっと知ろうとする意欲をもつ。

・調べたことから自分たちができることを考え、これからの生活に具体的なめあてと意欲をもち、適切に行動できるようになる。

児童の活動	◎気付きが生まれるような支援　☆評価
６年生の仕事をしてみよう（２時間）	
○６年生がしてくれていることについて思い出し、話し合う。	◎よく思い出して話し合えるように、１学期から掲示している「ありがとうカード」を提示する。
○６年生がしていた仕事（今回は「入学式の椅子並べ」）を体験してみる。【イ】	◎実感を伴って活動を進めていけるように、全員で体を使ってできる活動を選択する。 ☆６年生の仕事に、関心をもつことができたか。
・６年生ってやっぱりすごいな。	
○気付いたことをもとに６年生の仕事を調べる活動の計画を立てる。【ア】 ・６年生の仕事はどんなものがあるかな。	◎活動のめあてをはっきりと意識してもてるように、疑問に思っていることを全員で出し合うとともに、学習メモにめあてを具体的に書けるようにする。
６年生の仕事について調べよう（４時間）	
○２～５年生を対象に、「６年生のしている仕事」の聞き取り調査をする。【ウ、エ】	◎一人一人が聞き取りをすることができるように、初めはグループ単位で行動し、慣れてきたら一人でも聞けるようにする。
・委員会って何かな。 ・飼育委員会がどんな仕事をしているのか調べてみたいな。	☆自分が調べたいことについて具体的なめあてをもつことができたか。
○グループをつくり、６年生にインタビューをする計画を立てる。	◎興味を生かし、友達の考えを自分に取り入れるために、調べたい仕事別のグループをつくる。
○６年生にインタビューのお願いの手紙をみんなで書く。【エ】	◎願いを強めるために、クラス全員で手紙を書き、みんなで６年生に届けるようにする。
６年生に聞こう、仕事をさせてもらおう（５時間）	
○６年生にインタビューをしたり仕事をさせてもらったりする。【イ、エ】（本時）	◎より多くの気付きができるよう、仕事の手伝いを一緒にさせてもらえるよう６年生にお願いしておく。
○６年生の仕事について教え合い、新たな課題をもつ。　【オ】	◎６年生の気持ちや自分たちの生活にかかわる発言を取り上げてみんなに広める。
○もっと調べてみたいことについて、聞きに行ったり調べに行ったりする。【ウ、エ】	◎一人一人の願いに基づいた活動ができるように、授業時間や休み時間などを弾力的に運営する。 ☆体験から多様な気付きができたか。
・６年生ってみんなのためにいろいろな仕事をしているんだ。	☆６年生や学校への愛情や親しみが深まったか。
自分たちにもできることは？（４時間）	
○６年生の仕事について地図に表し、話し合う。【オ】	◎一人一人が調べてきたことの関係に気付けるように地図を使って話し合うようにする。
○自分たちができることについて話し合い６年生に手紙を書く。【エ、オ】 ・６年生のみなさん、いつもありがとう。 ・わたしはこれからゴミをもっときちんと分けます。	◎６年生への感謝の気持ちをもち、これからの活動につながる願いをもつために、自分たちの決意を含んだ全体からの手紙と、一人一人からの手紙を書く。 ☆自分たちの生活に意欲をもち、具体的なめあてがもてたか。

(3) 本時（７／１５時）及びその後の活動とその分析

ねらい・６年生にインタビューをしたり仕事をさせてもらったりすることができる。

・６年生とのかかわりを深め、学校の人々と自分のかかわりを考えることができる。

児童の活動・反応	活動の分析
１．６年生にインタビューや仕事の手伝いをお願いする。	
・どうやってうさぎの世話をしているのか絶対に教えてもらおう。	・６年生がうさぎの世話をしていることを調べて分かっていたため、教えてもらいたい気持ちが強まった。 → 今まで何度も聞き取り調査をしていたので、興味が増したり、活動のめあてが明確になったりした。
２．グループで６年生にインタビューや仕事をさせてもらう。	
・私の家のおばあちゃんもトマトを育てているよ。	・自分の家のことと結びつけることができた。 → ６年生に聞いたり、畑で草取りをさせてもらったりしたため自分の生活と結びつけて考えることができた。
・栽培委員会の人は虫も怖がらずに取っているんだ。すごいね。	・自分は怖くて取れなかったことを思い出した。 → ６年生の仕事を疑似体験したので、自分ならどうするかと比較して考えることができた。
・こんなたくさんの本をそろえるのは大変。クラスの本棚は？	・自分が本係なので、クラスの本棚と比べることができた。 → 図書委員会の仕事を見たりさせてもらったりしたことで、自分の係としての仕事ぶりを振り返り、係活動について考えることができた。
・一輪車が出しっぱなしだと、学校のみんなが困るんだ。	・学校のみんなが困るということに気付いた。 → ６年生が学校のために仕事をしている姿を直接見せるようにしたことによって、みんなのために働いているということに気付くことができた。
・ごみが混ざっているときは６年生が分けるんだ。これからは分けて出そう。	・ごみの分別をしないとみんなが困ることに気付き、きちんと分別しようとする気持ちをもつことができた。 → ６年生の仕事をさせてもらったので、自分もごみを分けて出そうという気持ちをもつことができた。
３．今日の活動を振り返る。	
・集会委員はマイクの前でも緊張しないでできるなんてすごい。	・やってみたら自分はすごく緊張した。 → 実際に仕事を体験させてもらったことで、普段見ている集会の仕事を共感的に考えることができた。
・放送委員はテレビ朝会のこともやっているんだ。	・テレビ朝会は校長先生が撮っていると思っていた。 → テレビカメラを使わせてもらったことによって、普段の学校生活に結びついた６年生の役割が分かった。

児童の活動・反応	活動の分析
○自分たちができることを話し合い、６年生に手紙を書く。	
・集会のときには、集会委員の人が前に立ったら、すぐ静かにしよう。	・自分たちが参加している集会を支えてくれている６年生たちがいることに気付いた。 → ６年生とかかわりをもち、そのことを踏まえて手紙を書いたため、自分の生活のことを考えることができた。
・自分たちも６年生みたいにがんばりたい。	・６年生に感謝の気持ちをもち、自分たちのこれからの生活に意欲をもつことができた。 → 今までの活動を振り返ることによって、自分のこれからの生活に意欲とめあてをもつことができた。
○その後の生活で	
・『うさぎに草をあげないで』という飼育委員会のポスターを見て、クラスに呼びかけた。	・校内に貼られている委員会からのポスターを見て、クラスのみんなに自分から呼びかけることができた。 → ６年生と直接触れ合うことによって学校のことを自分のこととして感じ、行動に表すことができた。
・ごみの分別を進んでするようになった。	・前にも増して、確かめながらごみを分けるようになった。 → ６年生と直接触れ合った後、自分の活動を振り返ることによって、自分自身の生活を考え変えていくことができるようになった。

(4) 考察

活動の効果は、その時間だけでなく後の活動においても多く現れた。前もって６年生の仕事を疑似体験したことが、実際に６年生と一緒に仕事をしたときに生かされて、新たな気付きを生んだ。その気付きは、今後、児童が生活の中で次の行動を決定していく際の指針として働くことと考える。また、知的な気付きは、単発の活動よりも、活動の連続性を大切にすることによって、より生まれやすくなり、広がりや深まりが出てくることが分かった。さらに、ねらいに合った適切な活動の時期を決定することが大切であることも分かった。

本単元では、グループごとに課題をもって調べたために、意欲的に活動し考えを深めたよい面もあったが、グループによって活動の活発さに差ができたり、教師が児童の活動や気付きの様子をとらえたりするのが難しい面もあった。活動意欲をさらに高め、見取る方法を工夫していきたい。

この活動の後、学級文庫の本を片付けたり、ごみの分別をしっかりしたりする姿が多く見られるようになった。児童の行動が変化していったということでは、その気付きが深まりや広がりを見せていったと言えよう。この後も、人と直接かかわる体験を大切にして、活動を広げていきたい。

〈ごみの分別をする子どもたち〉

2 「知的な気付きを見取る手立て」の実践事例

第１学年 「あきとあそぼう」

(1) 本単元における知的な気付きを見取る手立て

児童が思いや願いをもって活動するとき、そこにはその子なりのなんらかの気付きがあることを前提として、本単元では、児童の活動の中から知的な気付きを見取るために次のような具体的な手立てを考えた。

<table>
<tr><th>記号</th><th>見取る手立て</th><th>具体的な手立て</th></tr>
<tr><td>ア</td><td>活動前に、あらかじめ児童の主な気付きを予想しておく。</td><td>・児童の見取りたい姿、見取りたい知的な気付きを、一人一人について予想する。活動中にそれらが見られない場合、支援表に記入してある内容を支援するよう心掛ける。
<table>
<tr><th colspan="3">支援表
「木のはや木のみ、たねであそぼう」</th></tr>
<tr><th></th><th>活　動</th><th>予想される知的な気付き</th></tr>
<tr><td>A児</td><td>どんぐりごま</td><td>軸をさす方法など作り方</td></tr>
<tr><td>B児</td><td>どんぐり人形</td><td>どんぐりの形や種類</td></tr>
<tr><td>C児</td><td>やじろべえ</td><td>バランスをとること</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>イ</td><td>活動中の児童の様子からとらえる。</td><td>・友達や２年生、ゲストティーチャーの方、保護者とのかかわり合いの中で、相手に問いかけたり、繰り返し話をしたりしているときは、そばへ行き耳を傾け、そこにどのような気付きがあるのかを探る。また、本人に尋ねる。相手に確かめる。
・校庭や公園で木の葉、木の実、種などを集めながら秋の自然に気付いているか、行動や発言、つぶやき、表情に注目する。
・どんぐりなど木の実で遊びながらその形や色、種類などに気付いているか、発言、つぶやき、表情に注目する。
・公園で草木や昆虫などの自然とかかわりながら活動して、季節の変化への気付きやそれぞれの活動の中で知的な気付きがあるか、熱中して取り組んでいる様子、驚いたり喜んだりしている様子に注目する。</td></tr>
<tr><td>ウ</td><td>活動後、児童が作品やカードなどに表現したものから分析する。</td><td>・作品やカードから気付きを分析し、児童に聞く。
・授業協力者のゲストティーチャー、保護者から情報を集め、気付きが見られた場合、児童に確認する。
・友達のカードに付けた付箋から気付きを探す。
・見取り表に記入し、単元全体を見通せるようにする。</td></tr>
</table>

(2) 活動計画　（全１８時間）　　【　】は見取る手立て

単元のねらい　・校庭や近所の公園で遊んで、自然の変化に関心をもち、秋の自然に積極的にかかわり、親しむことができる。

・集めてきた木の葉や木の実を使って、遊ぶ物や飾りなどを友達と一緒に作ったりそれらで遊んだりできる。

児童の活動	◎見取る手立て　☆評価
２年生の「手づくりおもちゃのくに」へいこう　（３時間）	
○２年生が生活科で取り組んだ「手づくりおもちゃのくに」へ行き、２年生と一緒に遊ぶ。	◎２年生が招待状をもってきた時の様子から活動前の支援表を作成する。【ア】 ◎２年生に作り方や遊び方を聞いている児童、熱中して活動している児童などから気付きを見取る。【イ】 ◎自分で作った児童から話を聞く。【ウ】 ☆２年生や友達と一緒に楽しく遊ぶことができたか。
木のはや木のみ、たねであそぼう　（７時間）	
○いろいろな秋さがしをする。	◎一緒に秋さがしをしながら秋への気付きを見取るとともに、活動前の支援表を作成する。【ア】
○校庭のどんぐり拾いをする。	◎どんぐりの見つけ方や、どんぐりの種類に気付いているか見取る。【イ】
○どんぐりで遊ぶ。	◎人形やアクセサリー、こまややじろべえなどを作りながら、どんぐりの特性や作り方、遊び方に知的な気付きがあるか見取る。【イ】
○葉や種で遊ぶ。	◎さまざまな落ち葉や種があることやそれらを何かに見立てるような気付きがあるか見取る。【イ】 ◎作品やカード、付箋から見取り表を作成する。【ウ】 ☆木の実で遊んだり作ったりできたか。
あきのまえのこうえんであそぼう（８時間）	
○秋の前野公園に行き、自由に遊ぶ。	◎秋、公園、友達といった児童を取り巻く環境を一体的にとらえて、児童の思いや願いを見取って、支援表を作成する。【ア】
○グループごとに前野公園で遊んだり、観察したりする。（本時）	◎児童の思いや願いに沿いながら内容を変え、繰り返し活動し、活動の様子から見取る。【イ】 ◎ゲストティーチャーの環境学習センターの方や保護者から情報を集め、知的な気付きを探す。【ウ】
○かかわった人にお礼をする。	◎作品やカード、付箋、日記、日常の会話から知的な気付きを探し、見取り表を作成する。【ウ】 ☆秋の自然に関心をもち、かかわることができたか。

(3) 本時の活動（１６／１８時）とその分析

ねらい　・秋の自然の中で、楽しく遊んだり、観察することができる。

児童の活動	見取りの分析
1．ゲストティーチャーである環境学習センターの方や保護者の紹介を聞く。グループごとに挨拶する。	→ ゲストティーチャーのほうを向きしっかり紹介を聞いている子、挨拶している子はこれからの活動に関心が高いと思われる。
2．グループごとに公園に出かける。 （雨天のため、校内での活動）	→ 本時は、グループごとの活動の２回目である。グループは、児童の希望する活動によって分けてある。前回と同じグループの子は、その活動に対してこだわりがあり知的な気付きも多いのではないかと予想した。そこで 、支援表にそのことを記入しておき、気付きを見逃さないように心掛けたが、予想と異なる気付きも多かった。
3．友達と一緒に活動する。	
○「土の中のせかい」グループ センターの方が持ってきてくれた土と自分たちで集めた学校の土を比べたり、その中の生物を虫メガネで観察したりする。	→ Ｅ児はうずくまって土を入れた箱の中を一心にのぞいている。そばへ行き見守っていると、薬匙にのせた小さな虫を見せてくれる。「学校の土、虫いないんだ。どうしてかな。固いからかな。」と言う。Ｅ児は２種類の土を比較し、知的な気付きを得ている。
○「はっぱあそび」グループ センターの方の用意した葉を使って目隠しクイズや匂いクイズをする。	→ 前回にひき続いてこのグループで活動したＦ児は体全体を働かせて取り組む。センターの方から後で情報収集できるので、Ｆ児の状況を伝え、観察を依頼する。
○「音あそび」グループ センターの方の用意したフィルムケースに何かを入れて音あてクイズをする。	→ Ｇ児は、自分で音を作る場面で、友達と比べながら次々と中に入れる物を工夫した。声をかけると「中はなんだ。」と音を聞かせる。首をかしげるともう１度聞かせる。「水かな。」と答えると、喜んで「大当たり。先生、振り方で音が違うよ。」と振って聞かせる。これは知的な気付きであろう。
○「ふうせんあそび」グループ 昇降口で、大きいビニール袋をふくらませて風船遊びをする。	→ 袋の口がうまく結べず、何回もやり直していたＨ児に、自分で結べるように袋の口をしぼってもってあげた。児童は自分で袋の口を結び、満足そうであった。支援に結び付いた見取りといえよう。
○「ターザンごっこ」グループ 雨天のため希望を聞いて、葉のこすりだしや、図鑑での葉の名前調べをすることになった。	→ 葉脈をこすりだそうとしていたＩ児は、桜の葉を見ていて葉脈に気付くが、力を入れ過ぎて思うように仕上がらない様子であった。きれいにできている部分を指さして「ここきれいね。」と声をかける。しかし後でかいたカードに『だめ』とあった。ここで

	は、もう少しＩ児の気持ちをくみ、手を添えるなどの支援をすべきであった。 → 図鑑で何の葉か調べたＪ児は、桜の葉の根もとだけに粒があることに気付く。ゲストティーチャーのお母さんが興奮ぎみに「先生すごい発見です。」と知らせてくれる。確かめた後「大発見ね。」とほめ、皆に広める。センターの方に尋ねるとそれは蜜腺だということであった。これはゲストティーチャーからの情報提供により見取ることができた例である。
○「スタンプあそび」グループ 葉にインクをつけてスタンピングをする。	→ 葉にインクをつけているだけでなく、スタンプ台に葉をのせて台ごとスタンピングしているＫ児に、声をかける。Ｋ児の発想のよさを認めるとともに色が混じって美しいことをほめる。「金色がきれいね、年賀状にできそう。」と助言する。これは、Ｋ児が「ゴールドがあるといいな。」と金のスタンプ台をもってきたことへの共感でもある。
○「どんぐりのおみせ」グループ どんぐりやギンナンなどの木の実でペンダントやブローチを作る。	→ Ｌ児は熱心に金具をどんぐりにつけている。見守っていると他の子が「Ｌ君につけてもらった。」と言う。今まで友達とのかかわり方が苦手だったＬ児をおおいにほめる。
○「はっぱこうさく」グループ 厚紙などに葉を貼って冠やしおりを作る。	→ Ｍ児は多くの冠を作った。よく見ると葉はセロテープでぴったり貼ってある。「きれいに貼ったね。」と言うと「ぱらぱらにならないように貼った。」と返事をする。「いいねえ。」と気付きとアイデアを認める。 → 見取ったことを他の児童に広めたり、共感したり作品のよさをともに喜んだりする。
４．遊んだ感想を言う。	

(4) 考察

活動前に予想した児童の気付きは、実際には児童の気付きが多様であるために違うものも多かった。しかし、見取り表や支援表を作成したことにより子どもの思いや願いの移り変わりや考えの道筋を把握でき、効果的であった。

また、活動中の様子を見取る過程では、児童の思いや願いに共感し、その子の気持ちに沿うことが重要であることが改めて分かった。教師が見取り、意味付けたり価値付けたりした知的な気付きは、子どもの心に強く残っている。それは活動の後で書くカードに教師に認められたことを書く子が多いことからも分かる。

肯定的な見取りが効果的な支援につながるといえよう。

3 「知的な気付きを深め広げる支援の工夫」の実践事例

第2学年 「あきを楽しもう」

(1) 本単元における支援の工夫

本単元では、児童の知的な活動を深め広げる支援のあり方を考えるために、次の５つの視点から支援の工夫をした。

本単元では、人と触れ合いをもちながら、公園などの公共施設で秋を楽しむ活動を設定している。しかし、落ち葉やどんぐりを拾って遊べるような広い公園が学校の近くにないために、公共の乗り物を利用し、ねらいに合うような公園に行く活動を取り入れ、下表のような支援を試みた。また、２年生が、１年生に教えてあげながら共に秋を楽しむという明確な目的をもって活動に取り組めるように支援を工夫した。

記号	支援の視点	支援の方法
ア	一人一人が自分の気付きを確認し、興味を深める支援をする。	・公園マップを用意し、行きたい場所を確認させる。 ・公園課の人を招き、話を聞かせてもらう。
イ	気付いたことに対し、お互いの気付きのよさを発見するための支援をする。	・時刻表や路線図などをもとに公共施設までの道順や行き方を話し合うための場を設定する。 ・気付いたことを掲示し、お互いの気付きのよいところやアドバイスなどを応援カード（付箋）を利用して認め合うようにする。
ウ	気付いたことを振り返り、さらに深く追究しようとするための支援をする。	・気付いたことなどをカードや写真を見て振り返るためのコーナーを設ける。 ・もっと調べてみたいと思ったことをもう一度施設の人などに聞いてみることができるような機会を設ける。
エ	気付いたことを他の人に教えたり伝えたりするための支援をする。	・壁新聞などを使って、自分の気付きをまとめてさまざまな人にみてもらえるようにする。 ・実際に１年生を連れて公共施設に行き、自分たちが気付いたことを伝えられるような場を設ける。
オ	これまでの活動をもとに、新たな思いや願いをもつための支援をする。	・拾ってきた木の実や落ち葉、また調べたことなどを利用して次の単元につながるようにする。 ・ポートフォリオなどで児童の活動にかかわるものを集めておき、自分たちの気付きを価値のあるものとしてみることができるように教師が気付きのよさをそこに書き込んでいく。

(2) 活動計画　　（全２８時間）　【　】は気付きを深め広げる支援の視点

単元のねらい　・地下鉄や商店街、公園などで働く人々に関心をもつとともに、安全に気を付けてそれらを正しく利用することができる。

児童の活動	◎気付きを深め広げる支援　　☆評価
かかしまつりにさんかしよう　（７時間）	
○商店街の様子がどう変わったか見学しに行く。 ○商店街の人にインタビューする。 ○祭りに参加し地域の人々の様子などを観察する。 ○かかし祭り新聞を作る。	◎発見カードの中に興味がわくように書き込める地図などを入れておく。【ア】 ◎インタビューカードの利用を考えさせる。【ア】 ◎友達などに見てもらえるように掲示の場所を確保する。【エ】 ☆かかし祭りに興味をもち、自分が知りたい課題をそれぞれがもつことができたか。
１年生といっしょにあきを見つけに行こう　（８時間）	
○秋の遠足で楽しみにしていることを話し合う。 ○公園までの道順を調べ、地下鉄の乗り方を考える。 ○安全に気を付けて地下鉄などで目的地まで行く。 ○自然の中で楽しく遊ぶ。	◎話し合いコーナーで公園マップを見ながら話ができるように用意をする。【ア】 ◎路線図や料金表などを準備する。【ア】 また、それらを使って話し合い活動ができるようにグループを作っておく。【ア】 ◎発見カードを用意して気付いたことをメモできるようにする。【ウ】 ☆お互いの気付きを認め合い，また目的意識をもって話し合いに参加できたか。
１年生といっしょにあきを見つけに行こう　（８時間）　１年生と合同	
○１年生と相談しながらどんぐりや落ち葉を集める計画を立てる。 ○地下鉄など公共の乗り物を利用するときに気を付けることを取材する。（本時） ○取材したことを伝え合う。 ○代々木公園に行き秋を楽しむ。	◎自分たちが気付いたことを互いに教え合う時間をもつ。【エ】 ◎カードに書いた気付きを表にまとめ、友達と認め合うために応援カードを用意する。【イ】 ◎実際に行く途中で公共施設の人に聞いてみる時間を設ける。【エ】 ☆自分たちの気付きを分かりやすく伝え、目的を達成できた成就感を味わえたか。
みんなであきを楽しもう（５時間）　１年生と合同	
○公園で拾ってきたものを説明し合いながらいっしょに遊ぶものを作る。 ○自分の気付きや作品をファイルにまとめて次の単元に役立てる。	◎様々な遊びのアイディアが次の単元に生かせるように作り方などを発表させる。【オ】 ◎今までの活動で、気付いたことを振り返らせるためのファイルを用意する。【オ】 ☆今までの気付きをまとめ、次の活動につながる意欲が生まれたか。

(3) 本時の活動（１８／２８時）とその分析

ねらい　・地下鉄など公共の乗り物を利用しながら、そこで働く人々に関心をもつ。
　　・公共施設の利用を、目的をもって調べて、１年生に伝えたいという意欲をもつ。

児童の活動・反応	支援の分析
１．一緒に公園に行くときに１年生のために自分たちで地下鉄の乗り方を調べようという目的をもつ。	→ 前時に作ったバッジを付けたり、１年生からの手紙で頼まれたことを確認したりすることで、１年生のために地下鉄の乗り方を調べようという意欲を高めることができた。
２．地下鉄でのキップの買い方、駅の施設の利用の仕方、マナーなどについて、実際に地下鉄に乗りながら調べる。 ・乗り方や気を付けることを、探検カードに書こう。 ・友達は、探検カードに何て書いたのかな、自分のと比べてみたいな。 ・エスカレーターにも点字があるね。 ・切符を買うときは、どこを見ればいいのかな。 ・子ども料金はいくらなのかメモしておこう。 ・１年生に分かるように写真に撮っておこう。	→ ここでは探検カードを用意し、自分の気付きを文字で表す活動を入れることで、自分で自分の気付きを確認させる意図があった。この活動は、後に発表するとき役立った。 → 友達と一緒にカードに気付いたことを書くようにすること、互いに刺激し合い、たくさんの気付きをメモしようとする意欲に結びついた。 → １年生のことを念頭に置きながら気付きをメモしているため、「安全面」での気付きが多い。ここでは、支援として、安全面に対する気付きとともに、切符の買い方や、料金などへの気付きも高く評価することで、気付きの幅を広げていきたい。 → デジタルカメラを用意し、メモで表せない、新しい気付きができるようにしたことで、１年生に説明するときに分かりやすくできた。
３．地下鉄に乗ってみて、さらに分からなかったことを、駅の人に聞いてみる。 ・線路に物を落としたときは、どうすればいいのだろう。 ・改札口に駅の人がいるよ。聞いてみようかな。 ・すみません、Ｉ小学校の２年生です。今度地下鉄を使って公園に行くのですが、分からないことがあるので教えてください。	→ 事前に駅員や係の人と打ち合わせをして子どもたちが自分の気付きをもとに、疑問点などを解決するためのインタビューができる時間を設定する。これは、人と直接触れ合うことのできる大切な場面である。そこでは知的な気付きが生まれやすいと考えられるため、人とかかわるための支援は、非常に有効だといえる。 また、駅員や係の人は、自分たちの気付かなかった点などを補って話してくださるため、気付きの深まりがみられた。

4．教室に戻ってから気付いたことを振り返り、１年生に伝えたいことを表に書き込みながら発表する。 ・わたしは、１年生と一緒に公園に行くときに地下鉄でホームでの並び方について教えてあげます。 ・○○さんは、子ども料金のボタンの押し方を分かりやすく書いていたので１年生もよく分かると思います。 ・△△さんは細かいところまでよく見ているね。	→ 黒板に気付きのメモを直接貼れる大きな表を用意しておき、全員が友達の気付きを見られるように支援する。さらに表の下に友達の気付きのよいところを見つけたり、アドバイスを付箋（応援カード）に書いて貼れるスペースを設けたりして、お互いの励みになるような支援を考えた。児童は、友達から認められた気付きによって、自分の気付きを深めることができ、自分の気付きを友達に教えることによって、自分の気付きを友達にも広めていくことができた。
5．地下鉄の乗り方で分かったことを１年生の教室で説明するために、何が大切か話し合いをする。 ・広い改札口の写真は１年生に見せたいね。料金表も見せようよ。	→ １年生に伝えたいことがたくさん出てきて、どれが一番大切なことかを気付かせることが難しいと実感した。そこで、これから何を一番伝えたいかを考えさせるような問いかけを工夫していく必要があると考えた。

(4) 考察

知的な気付きを深め広げる支援とは、次の３点が大切であると考える。

１点目は知的な気付きの興味関心を芽生えさせ、それを持続させていく支援である。１年生と一緒に公園に行くという目標をもったとき、興味や関心を公園に行く日まで持続している児童が多かった。

２点目は気付いたことを楽しく表現していけるようにする支援である。写真やカード、新聞など、多様な表現の仕方を紹介することで、自分の得意な表し方がだんだん分かり、自分たちの気付きを表していけるようになるということが確認できた。

３点目は社会や人と密接にかかわらせるような支援である。例えば、インタビューなどで直接人から聞くことによって、その人の人柄にふれ、他の知識も得ることができる。そこには、図鑑やコンピュータから得た知識とは違い、人との触れ合いが楽しいという感情が生まれてくる。その中で知的な気付きが深まったり広がったりすることが多いと考える。

これからもこの３点に留意して支援の工夫をしていきたい。

Ⅴ　研究の成果と今後の課題

私たちは研究主題に迫るため、仮説を立て、授業実践を通して検証を行い、以下のような研究成果と課題をもった。

1　研究の成果

(1) 知的な気付きが多く生まれるような学習活動の工夫について

例えば町探検のとき、教師が、そこの町を知りたいと思っている外国の人を導入で登場させることで、児童は「外国に住む人に自分の町を教えよう」という自分のめあてや見通しをもちながら活動を持続させ、多くのことに気付いた。児童にとって必然性のある活動からは、知的な気付きが生まれやすいことが分かった。

人や社会、自然と直接かかわる活動からは、児童は楽しさや喜びを感じ取りやすく、知的な気付きも多く生まれた。また、児童の思いや願いに沿って活動を繰り返し行ったり自分の考えをまとめたりするためには、柔軟な活動計画を組むことも必要だということが分かった。

(2) 知的な気付きを見取る手立てについて

知的な気付きは、見取り表を作り、予想することで、ある程度は効率的に見取ることができた。そして、そういう姿勢を教師がもつことにより、それまでは見逃していた児童の些細な発言や表情の変化に注目し、知的な気付きをより把握できるようになった。それを教師が記録していくことで、児童の学びの様子をとらえたり、支援の工夫に生かしたりすることができた。

また、児童が表現したものから知的な気付きを見取ることも多く行ってきた。例えば、一本の木に関する記録を取り続け、後で並べて見ると季節の変化に気付くなど、ポートフォリオのような形で児童のかいたものを残しておくことで生まれる気付きも多いことが分かった。

(3) 知的な気付きを深め広げる支援の工夫について

教師の共感や賞賛の言葉は児童の活動の大きなエネルギー源である。自分がしたこと、気付いたことが認められたりほめられたりした児童は、友達に自分の気付きを伝えたり、活動を発展させたりした。そしてその積み上げが自分自身への自信となっていった。

漠然とした気付きであっても、教師が質問したり関連付けたりすることで、児童が自分の気付きをはっきり自覚できたことも多かった。教師の言葉かけだけでなく、友達の気付きを知ったことで、友達のよさを知ったり、それに刺激されて新たな気付きや願いが生まれるなど、児童が互いに学び合えるよう支援することも知的な気付きを深め広げることに有効であった。

2　今後の課題

(1) 多様な活動における支援のあり方をさらに探ること

課題別グループの数が多かったり、複数の場所で活動したりした場合、教師が知的な気付きを十分見取れないこともあった。授業協力者との連携、児童の表現力を向上させるための手立てなども考えていく必要がある。それに、一瞬でも表出した児童の気付きを敏感に見取れるよう、教師の感性をより磨いていくことも大切である。

(2) 支援と評価のあり方を探ること

活動の中で行った支援が適切であったかどうかは、その児童のそれ以降の学びの姿で判断しなければならない。評価については、実践研究を深めることはできなかった。今後、よりよい支援と評価のあり方について、児童の学びの姿を大切にしてさらに研究を続けていきたい。

平成１３年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１３年度　第４１号

平成１４年１月２３日

編集・発行　東京都教職員研修センター
所在地　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　株式会社　ドゥ・アーバン